

反原発運動の25年——三浦翠さんに聞く

聞き手 三宅義子(本会共同代表)

活動を始めた理由

——「原発いらん! 山口ネットワーク」は一九八六年のチェルノブイリ原発事故をきっかけにして山口で初めて誕生した反原発・脱原発の市民グループです。活動歴は長く、会報もこの七月で二九五号を数えています。この活動を始められた経緯から話してください。



2010年、田ノ浦海岸で中電の埋立阻止行動に参加する三浦さん

三浦 チェルノブイリ事故が起こったのは四月二六日のことです。間もなく八〇〇km離れた日本にも放射能が飛んできました。私は七〇年代に有吉和子の『複合汚染』などに影響を受けて安全な食糧自給のできる生活をしたと思います、鹿野町で無農薬有機の農業を始めていました。五月には自家栽培のお茶を摘み、それを安心して飲んでいたのでした。

でも、それも汚染されていたことを知り、とても悔しい思いをしました。私はガイガー・カウンターをもっていたわけではありませんが、伊方原発の出力調整実験反対の集会がもたれたとき、そこで会った人にも教えられました。グリーンコープの他にも高木仁三郎さんの「原子力資料情報室」などが食品汚染の情報提供をしており、当時は人びとの関心も高かったのです。

「原発いらん! 山口ネットワーク」は八七年に夫三浦泰生と共に友人、知人に呼びかけて始めたものです。高校教員の夫は一五歳のとき広島でヒバクして、チェルノブイリ事故に危機感をつのらせていました。仕事を続けるより原発を作らせない方が大事、と八七年には定年まで二年を残して退職しました。上関原発計画が浮上したのは八二年です。

これは絶対に止めなくては、と考える人は周囲には多く、長門、下関、徳山の要になる人が呼びかけ人になって広瀬隆さんと呼んで初めての講演会を三カ所で催すことになったのです。周南市民会館では

一〇〇〇人くらいを集めておこなわれたのですが、このとき祝島の山戸貞夫さんも当時はお元気だった奥さんと一緒に駆けつけられ、挨拶に立ってくれました。これがきっかけになって「原発いらん! 山口ネットワーク」が発足したのですが、どういう名前にしようか皆であれこれ思案したものです。

情報共有のための会報づくり

広瀬講演会を開くにあたって皆で何回も集まって準備の会合をもったわけですが、その時に話し合いの中身を来られなかった人にも伝えるために文章にして、新聞の切り抜きや他地域の反原発運動の資料を添付するなどして通信を出しました。これが今に続く「原発いらん! 山口ネットワーク」の会報です。B四判の紙型を二つ折りにしたものの裏表をつかって八〜一〇ページ、活字ではなく、手書きの原稿、人によってはワープロ原稿で寄稿されるのでそれをそのまま貼り付けて印刷したものです。

——私は今まで三浦さんたちの活動については知らないまま、つい最近になって数カ月分をまとめて読ませていただいたようなわけですが、この会報は原発状況について非常に的確な情報を提供してくれました。ああ、そうだったのかと蒙をひらかれる記事がいっぱいあります。3・11以来、新聞を読むときは原発記事も逃さないよう注意深く読んでいます。

が、推進派の狙いや政府の政策の方向性を的確にかむことができない。また、現在の緊急課題は何か、どこの原発を再稼働させようとしているのかよくわからないままです。この会報に盛り込まれた的確な情報によって、私は、反原発、脱原発活動家が育つてゆく過程も垣間見たような気がしました。そういう人たちが会員なのです。

三浦 ええ、会員は三〇〇人程です。会報は私と山本由紀子さんが毎月交替で作っているのですが、昨秋から彼女の体調が悪いので、今は一人で書くのでちよつと大変です。

狙われる伊方原発再稼働

——会報から

——この地域の目下の緊急課題は伊方原発再稼働問題ですね。

三浦 三月二五日に周南市で講演会をもったとき広瀬隆さんはこう言われた。「西日本の皆さんは呑気すぎます。それは多分東京に暮らす私たちのように日々放射能に向きあつて、食べる物一つ一つの放射能汚染に気を遣い、地震がある度に福島原発4号炉の使用済核燃料プールが抜け落ちるのではと夜も眠れないような毎日を送つておられないからだと思いますが、大飯原発と共に再稼働が狙われているのは伊方原発です」。そして、東京に戻られた広瀬さんの呼びかけで、瀬戸内海を囲む各県の市民がネットワークを作って伊方原発再稼働をストップさせようということになり、四月一五日に松山市に岡山、広島、山口、大分、四国四県から一五〇人が集まり、「伊方原発の再稼働を許さない市民ネットワーク」

を結成。次のような集会宣言を採択しました。「伊方原発は日本最大の活断層・中央構造線からわずか六kmの所にあり、破砕帯という崩れやすい地質の中に建っているため、東海、東南海、南海地震が起これば東日本大震災と同じような巨大地震になることが予測されています。伊方原発も福島原発と同じような過酷事故になる可能性が高いので、参加者は各自自治体に伊方原発再稼働「NO!」をつきつけよう」と。

それから六月一〇日には現地の「伊方原発をとめる会」とともに松山市で一三〇〇人規模の大集会をもち、愛媛県への申し入れもおこなわれました。八月一九日には「ストップ伊方原発、とめよう大飯原発8・19松山行動in愛媛」を計画中です。その他に、北九州市で震災がれきが燃やされそうな問題も緊急の課題です。山口県にモロに放射能が飛んでくることになるので、なんとか止めたいです。

会員たちの活動報告

——会報で取り上げられた講演会開催や抗議行動のお知らせと報告、そして上関関係の裁判傍聴記などの記事の他に、私が興味をもったのは会員のユニークな反原発行動の紹介です。とくに元県議の「小中進さんの上関原発中止を訴える辻立ち連続四周年に拍手を送る会」が七月一日におこなわれるという記事に引きつけられました。

小中さんが平生で辻立ちを始めたのは、祝島の月曜デモを見て一人でも続けられる行動を、と考えたため、雨の日も風の日も休むことなく続けられた。「さわらぬ神に祟りなし」と無関心を決め込んでき

た上関周辺二市三町と県民のほとぼりがさめれば必ず建設する、と言つてはばからない中国電力社員とは対照的に、3・11以後県民の関心は高まり、とりわけ若い女性や子連れの女性の関心が高まっているなかで自分は子どもや孫世代への責任を果たすために上関原発が中止になるまで辻立ちを続ける、と決意を述べる小中さんの寄稿文は感動的でした。

さらに、伊方原発再稼働反対を訴えた会員の伴よしともさんが五月二七日の周南市議選で当選されたことについて、「完全無所属市民派議員の誕生」と喜ぶ記事を通して会員自身の反原発行動を知ることができました。この会報が会員同士の情報交換の媒体として機能していることがよくわかります。

上関原発計画をやめさせなくては!

——発足当時の会報発行の経緯を聞いているうちに話題が現在の活動に移ってしまいました。「ネットワーク」の歴史に話を戻しましょう。

三浦 さまざまな活動をしてきたのですが、すべては上関原発計画をやめさせるためです。情宣活動としては会報もその一つですが、小冊子もいくつか作りました。一つは、長年伊方原発の反対運動に取り組んできた斉間淳子さんをお呼びして話を聞いたのですが、そのダイジェスト版を冊子にまとめて上関全体に配布しました。さらに福島原発で現場監督として働いてこられた方ですでに故人となられました。が、平井憲夫さんをお招きして安全管理の問題や被曝労働の問題について各地で講演会を開いたことがあります。これもダイジェスト版を冊子にまとめ、上関町に配布しました。久米三四郎さんの原発のし

くみ、問題点をまとめたパンフも配りました。

上関周辺五町にビラを入れたこともあります。一〇万人署名運動——これは一九九〇年頃でしたか——もやりました。講演会は何回やったか数え切れないくらいです。広瀬さん始め、久米三四郎さん、小出裕章さん、今中哲二さん、小林圭二さん、高木仁三郎さん、越生忠さん、藤田祐幸さん、飯田哲也さんと。上関情勢の推移とともにあらゆることをしました。祝島の皆さんといっしょにした県庁前の抗議行動、さらに中電への抗議行動と雨についての広島市内のデモ行進、そして裁判の傍聴とカンパ集めなど。

——その間、「原発いらん！ 山口ネットワーク」の代表は武重登美子さんに代わっていますね。

三浦 そうです。夫は一九九九年に六九歳で亡くなりましたので。武重さんはもともと柳井で「原発を考える会」を始めた人で、「ネットワーク」にも参加していました。柳井に「ネットワーク」の拠点があることは、私が住んでいる周南市のほすれの鹿野町より祝島にも近く島の人びとにとっては心強いことですから。

埋め立て工事阻止行動

私たちが本場に忙しくなるのは、二〇〇八年に県が田ノ浦埋め立て許可を出して中電が埋め立て工事にとりかかるうとした二〇〇九年九月からです。私は鹿野町の山の中から祝島の人たちが浜辺での座り込みや海上で船で抗議行動をするときに現地に駆けつけるのですが、柳井、田布施など周辺の人びととシーカヤック隊の若者たちは夜も大島、柳井、下松の港で見張りをして中電の台船が動かないか監視し

ました。広島や大分その他の地区から応援に来てくれた人たちもいます。その連絡が現地に入って田ノ浦海岸での祝島の抗議行動の態勢が整えられるのです。本場に皆さんのすごい闘いだっつと思えます。

攻防は一年半続きました。二〇一一年二月、田ノ浦の浜には深夜から六〇〇人の警備員が押しかけて来て、浜に人が入れないよう柵を作ろうとしました。三日間の激しい攻防の末、祝島の女性がケガをされて、いったん休止になりました。

放水口側には祝島の船が陣取っているわけですが、海上保安庁のゴムボートが何十隻も近づいてきて祝島の船にぶつかる。それに気をとられているとスキをつけて土砂を積んだ台船が侵入してくるので。海上保安庁がこんなことをやりだすと、いくら祝島でも防ぎきれない、と不安の声が聞かれるようになった矢先です、3・11が起こったのは。神がかりのな言い方ですが、田ノ浦の生き物たちが、地球に助けを求めたんじゃないかと思うくらいです。

3・11がなかったら埋め立てられていたでしょう。また、一年半をもちこたえた田ノ浦の攻防は全国からはせ参じてくれたシーカヤック隊の若者たちの奮闘なくしては語れません。彼らの海を守りたいというまっすぐな意志が祝島の人たちをもふるい立たせ、またその情報発信力で全国の仲間たちを田ノ浦に呼び寄せたのです。次々と訪れてくる若者たちが強い風の中、浜にテントを張って泊まってくれる様子には頭が下がりました。

——その攻防のさなかに中電は祝島島民側を妨害行為をしたとして四名を訴えたわけですが、そのなかにはシーカヤック隊の若者も二名含まれていましたね。中電の主張を認めて、業務妨害の損害賠償金と

して四八〇〇万円の支払いを命じる仮処分決定が出されたのですが、中電が提出した証拠資料には事実と異なるものがあり、裁判官からも正されていますが、中電は整合性のある証拠を出せないまま二年が経過。つい最近の新聞報道によると、中電は裁判所の和解提案に応じたとありますが…。

三浦 和解案が出たのはまた別の海岸での妨害行為に対する裁判ですが、裁判所がそのような動きをしたのは気が引けたのではないのでしょうか。でも損害賠償訴訟では中電は四八〇〇万円の賠償金を三九〇〇万円に下げただけです。この訴訟は、中電が反対派を押さえ込んで原発建設を強行するために起こしたわけで、企業・政府など力をもつ団体が原告となって権力をもたない弱者を被告にして威圧・恫喝・報復する「スラップ訴訟」と呼ばれるものに当たります。アメリカでは多くの州がスラップ訴訟を排除する法律を持っているようですが、日本にはそれがありません。

このようなスラップ訴訟に加えて上関関係の裁判は、中電が取得したとされる神社地の売却をめぐる問題を含めて現在四件が法廷で係争中です。審尋などはまだいくつもあります。支援者たちはよほどのことがないかぎり山口地裁に傍聴に通っています。そんなわけで私たちのすることはいろいろあります。

市民運動としての反原発・脱原発を阻むもの

——山口県内の脱原発・反原発グループをみると、「原発いらん！ 山口ネットワーク」の他に「原発いらん！ 下関の会」の活動も活発です。もとは三浦さんたちと一緒にやっていた人たちが中心になっ

て下関を拠点に活動を起こしたわけですが、なぜ県庁所在地である山口市には脱原発グループが生まれないのであるのか、と私は疑問に思っているのです。

三浦 下関は一九七七年に豊北原発計画が浮上し、漁協はじめ地域住民の反対闘争で計画を撤回させたという土壌があります。私たちは下関の運動とは情報を共有する形でやっています。山口市には「被爆二世の会」の地道な活動はあるのですが、反原発、脱原発運動という形で一般市民を巻き込んではいません。理由は、山口市には県庁があつて公務員人口が多いから運動という形ではやりにくいのかもという意見もあります。でも、3・11後は脱原発の女性グループも生まれています。

——概して公務員は自分の生活安定に満足しているだけのごとを真剣に考えないということでしょう。原発推進は「国策」だから、それに追従するのをよしとしましたまま思考停止状態にあると思います。二井知事も、上関原発埋め立て工事、そして岩国基地問題について「国策だから」と言つて地元民の反対を無視してきました。

三浦 徳山（現周南市）はいわゆる企業城下町です。大工場が多くて、普通の市民は少ないので、脱原発運動はやりにくい。会社によっては、家族がそういう運動に関わりをもつのを制限するようです。たとえば、「親子劇場」でさえ、劇を見に行くのはいいのだけど、会員になつてはいけなとか。ですから徳山でも、講演会などをやっても人が集まりにくいということがあります。

反原発運動の担い手としての女性たち

——最後になりましたが、二〇数年間も反原発運動をつづけてこられたことを三浦さんご自身はどう考えておられますか。

三浦 やつているうちに二〇数年間経ってしまったというのが正直なところ。祝島の皆さんの闘いがあつたから、それにくつついてやっているうちに二〇数年間になってしまったわけ。3・11で福島事故があり、日常的に放射能と向き合わざるを得ない状況になつていることが本当に無念で悲しいです。早く日本から世界から原発をなくしたいと思います。

——貴重なお話をありがとうございます。今日の話のなかでは、とりたてて女性と反原発運動というようなことは言われませんでした。私自身はそういう問題設定のなかで話をうかがつていました。一九八六年のチェルノブイリ事故後、日本で初めて反原発・脱原発の大きな運動のうねりが起こり、担い手はもちろん男性も多かつたけれど、女性の運動への参加の動機は際立っています。環境汚染、食物汚染が子どもたちに及ぼす深刻な影響についての不安という点で女性は一貫しており、それは3・11以後の今に続いています。

脱原発の集会に行くと、これまでの政治集会には無縁だった若い女性、とくに子育て世代の女性たちの参加が目立ち、廃炉に向かってラディカルな行動をする女性たちも多い。一方、男性たちは「原発ゼロにする」と経済が停滞する「など」というようなことを言つて現状維持にとどまる傾向にある。この対比自体が社会の中で女性と男性の置かれた位相の違いを表していて、その意味で反原発運動は歴史的にみても、女性によって担われてきたと言つても過言ではありません。そして、先ほど、山口市に脱原発の

女性グループが出来たと言われましたが、これも「保守王国山口」という不毛の凍土に裂け目を入れようとする女性たちの意識と行動の現れだと思えます。

三浦さんのこれまでの歩みは女性と反原発運動との関わりを典型的に表しているのではないのでしょうか。（インタビューは二〇一二年七月一日に山口市内の三宅事務所でおこなわれた）



編集後記

西山太吉講演の報告記事として「活憲」の『にゅうすれたあ』に本会秋地区世話人の藤井郁子さんは「反戦の夏」「緊張の夏」という言葉で書いていたが、この夏、西山さんの講演記録作成作業に取り組んでいた私にとつてもこの思いは、同じである。沖縄基地問題を他人事として真剣に考えてこなかつた私たちの盲点をついて本土の沖縄化が着々と進み、日本は軍事国家化し「准戦時体制」（共同代表の瀬瀬厚さんの言葉を借りれば「臨戦国家」）に入りつつあるのだが、西山講演はそのプロセスを日米安保条約下で誕生し、強大な権力を掌中に収めた「日米同盟官僚」の意識と行動に焦点を合わせてえぐり出した。このような衝撃的な講演を聴いたあとでは、誰しも日本社会の現状と今後について真剣に考えざるをえない。今、私たちに何ができるのだろうか、と。その意味で、私たちにとつて西山講演はまさに「反戦の夏」「緊張の夏」をもたらしてくれた。「行動の秋」を迎えることで、自身の体験に裏打ちされた、この西山さんの知見をいささかでも共有することができたら、と思う。（m）

平和市民

No. 8

発行日 2012年9月28日

頒 価 1部・300円

目次

- 空飛ぶ恥！ オスプレイを、岩国・沖縄はもちろん、日本中どこへも飛ばさせない 田村順玄 p.1~3
- 沖縄返還から40年、この国は変わったのか 西山太吉 p.4~11
- 詩 迎合 堀場清子 p.12
- 反原発運動の25年——三浦翠さんに聞く 聞き手 三宅義子 p.13~16

連絡先

平和憲法ネットワーク・やまぐち
〒753-0063 山口市元町3-49
自治労会館 山口県平和運動フォーラム内
TEL 083-922-1841
FAX 083-924-8145

空飛ぶ恥！ オスプレイを 岩国・沖縄はもちろん、日本中どこへも飛ばさせない

「リムピース」共同代表・岩国市議 田村順玄

私は先の戦争が終わる三日前に旧中国で生まれ、あれから六七年目の夏を迎えた。これまで岩国基地とともに過ごしてきた六六年間であったが、とりわけ今年には数々の話題のなかでも大きな課題となっている「MV22オスプレイ」で揺れる岩国の夏とめぐり合わせた。私はいまこの瞬間、こうした課題と真つ正面から立ち向かいさらに果敢に取り組みを強めて行きたい！ そんな決意に迫られた二〇一二年の夏。以下は岩国からの報告である。

私だけが基地入場を拒否された

五月五日「こどもの日」、岩国基地では「日米親善デー」と称し米海兵隊岩国基地が開放される。一年で一回だけ一般市民の入場が許されるこの日、岩国基地へは全国から多くの人が訪れる。今年の日米親善デーには実に二八万人が入場した、と基地側の発表があった。私もかかわっている「ピースリンク広島・呉・岩国」のメンバーは毎年入場者に反基地を訴えるチラシを配布し街頭宣伝をおこなっている。

今年も用意した三〇〇〇枚余のビラを配布し、空母艦載機移転や一・四倍に拡張され、滑走路移設事業で大きくなった基地が、爆音被害の軽減につながっていない現実に加えて、とくに今年「オスプレイ」配備について強く訴えた。そんな

「蜂の一刺し」のごとき私たちの行動にエールを送る人びとの姿もたくさんあり、勇気がわいてくる街宣行動だ。

その基地開放行事に、たった一人だけ米軍から入場を拒否された市民がいる。それは私・田村順玄であるが、昨年九月に開催された海上自衛隊の公開行事の際、基地内に入場した直後に自衛隊から退出を求められ、三時間のすったもんだの末、退出を余儀なくされた経緯がある。米軍に間借りしている海上自衛隊が米海兵隊側から「田村順玄の入場を認めない」という達しがあるから、拒否するといふのだ。

さて今年の基地開放ではどう扱われるか。ビラ配布行動に先がけて米軍側の動きを確かめるため、私は入場の実験を試みた。取材のマスコミ関係者も多数同行し、何千人もの人びとでこつた返す入場門を一〇分以上かけて入り口に近づき米軍敷地にかかった途端、一〇人をはるかに越える警備要員に取り囲まれその位置から入場を阻止された。自分の確認もしないのに「田村さんの入場を米軍は拒否します」という趣旨の通告で何の理由の説明もなく私の入場は今回も拒否された。

後日私は米軍連邦政府の情報公開手続きである「FOIA」で入場拒否に至った関係書類の開示を求めた。一ヵ月後、米軍FOIAの担当部局から届いた書類では改めて拒否の理由はいっさい回答